

第7 季節調整

1 季節変動と季節調整

消費者物価の変動には、季節による特有の値動き⁴⁰（季節変動）の影響が含まれる。季節変動の影響を除いて消費者物価をみるためには、指数の前年同月比で変動をみる方法がある。このほか、指数に含まれる季節変動を推計し、これを除去した指数（季節調整済指数）をみる方法もある。季節変動の推計方法には様々なものがあるが、2015年基準消費者物価指数の季節調整済指数は以下の方法で作成する。

2 季節調整済指数の作成方法

季節調整の方法は、アメリカ合衆国のセンサス局で開発されたプログラムX-12-ARIMAを用いる。X-12-ARIMAで設定するスペックファイルは、「付5 X-12-ARIMAによる季節調整の詳細」参照。

3 季節調整済指数の作成に用いるデータ

季節調整済指数の作成には、2010年1月以降の指数を用いる。ただし、2010年1月から2014年12月の指数は、下式のとおり、系列ごとに2010年基準の2015年平均指数で接続した指数を用いる。

$$\begin{array}{l} \text{2015年基準接続指数} \\ \text{（季節調整用原系列⁴¹）} \end{array} = \begin{array}{l} \text{2010年} \\ \text{基準指数} \end{array} \times \frac{100}{\text{2010年基準の2015年平均指数}}$$

4 季節調整済指数の改定

毎月公表する時系列データの季節調整済指数は、始期である2010年1月から前年12月までのデータから求められる当年1月から12月までの季節要素（推定季節指数⁴²）で当年の各月の原系列を除いて算出する。その後、当年12月までのデータがそろった時点で、当年のデータを含めて再び季節調整を行い、季節調整済指数を改定する。このように、季節調整済指数は、毎年新しいデータが加わる度に、それを含めて計算することにより始期である2010年1月以降の値を全て改定する。

⁴⁰ 例えば、衣料品は季節の変わり目が近づくと価格が下がることが多い。

⁴¹ 原系列には端数処理前の指数を用いる。

⁴² 端数処理前の（推定）季節指数を用いて季節調整済指数を算出する。なお、季節調整済指数は小数第2位を四捨五入し、小数第1位まで表章する。季節調整済指数の前月比は、端数処理前の指数により計算し、小数第2位を四捨五入し、小数第1位まで表章する。

5 季節調整済指数の作成系列

次の15系列の指数について、全国及び東京都区部の季節調整済指数を作成する。

(1) 固定基準方式

< 基本分類指数 >

- ・ 総合
- ・ 生鮮食品を除く総合
- ・ 持家の帰属家賃を除く総合
- ・ 持家の帰属家賃及び生鮮食品を除く総合
- ・ 生鮮食品及びエネルギーを除く総合
- ・ 食料（酒類を除く）及びエネルギーを除く総合

< 財・サービス分類指数 >

- ・ 財
- ・ 半耐久消費財
- ・ 生鮮食品を除く財

(2) ラスパイレス連鎖基準方式による指数（参考指数）（全国のみ）

< 基本分類指数 >

- ・ 総合
- ・ 生鮮食品を除く総合
- ・ 持家の帰属家賃を除く総合
- ・ 持家の帰属家賃及び生鮮食品を除く総合
- ・ 生鮮食品及びエネルギーを除く総合
- ・ 食料（酒類を除く）及びエネルギーを除く総合

[参考] 季節調整の方法

季節調整の方法には、総合、10大費目、中分類といった項目の指数を、分類項目ごとに季節調整する方法（単独方式）と、品目ごとに季節調整を行い、それらの季節調整済指数をそれぞれのウエイトで加重平均し、上位項目の季節調整済指数を求める方法（インプリシット方式）がある。

消費者物価指数においては、例えば毎年4月に価格変動する授業料のように階段状の動きを示すものなど、季節調整のモデルに当てはまらない品目がある。このことから、消費者物価指数の季節調整には、総合指数などに対する単独方式を採用している。